
VI. 全体計画

6. 1 将来年間利用者数の想定

実績値から将来年間利用者数を推計する。

本公園の近年における入園者数は、概ね年間 280 万人である。本計画により新たな施設が付加され、公園としての魅力がさらにアップすることから再整備後の年間利用者数は増加すると考えられ、1割増の年間 310 万人程度を目指すこととする。

6. 2 駐車場台数の設定

駐車場台数は、過去の駐車場利用の実績値に基づいて、将来利用者数の推計値や東部丘陵線利用による来園手段割合の変動を考慮した上で、必要容量を検討する。

閉園前の過去3年間における普通車の駐車場利用台数の過去3年間の平均をみると、上位第3位の駐車台数は約3800台となっている。本計画では、上位第3位の駐車台数を基準となる利用日として設定し駐車場容量を検討する。

●基準日における普通車利用台数

本整備により前述（将来年間利用者）のように利用者は1割増加する。これにより基準日の普通車台数も1割増加するとし、 $3800 \times 1.1 = 4180$ 台となる。

一方、閉園前の公共交通機関を利用しての来園者割合は1割であるが、整備された東部丘陵線を利用しての来園は増加すると考えられる。その来園者割合は、愛知県における郊外鉄道沿線レジャー施設のマストラ利用率を用いて28%と設定する。

これにより、基準日における普通車利用台数は、 $(4,180 \text{ 台} \div 0.9) \times 0.72 = 3344$ 台となる。

●駐車場必要容量

回転率を $1/1.8$ （平均滞在時間を平成13年度国土交通省公園利用実態調査による国営公園の休日平均在園時間データより約3.1時間とする。本公園は広域公園であるが規模・利用人員等、国営公園級であり国営公園在園時間データにて計上）とすると、駐車場の必要容量は以下の通りとなる。

- ・必要普通車駐車台数 $3,344 \text{ 台} \div 1.8 \div 1,860$ 台
- ・身障者用スペースについても、必要台数を確保する。
- ・基準日を越える利用がある場合には、公園利用者の動線には直接影響がない管理用園路を臨時駐車場（約2km、縦列駐車で約260台駐車可能）として活用するなど、運営面で柔軟な対応を検討する。
- ・大型車についてもマストラ利用率を考慮し換算すると、最大日利用台数は《 $(84 \text{ 台} \langle \text{実績値} \rangle \times 1.1) \div 0.9$ 》 $\times 0.72 = 74$ 台となる。大型車で来園は団体行事等が多く、在園時間が普通乗用車よりも長くなり、回転率も普通車より小さくなる。また、大型車利用がされない際は、普通車の駐車スペースとしても活用できるため、普通車で計算したような回転率は考慮せず、現況台数程度（72台）を基本とした設定とする。
- ・その他、自動二輪については、過去の利用実績から現況の駐車台数（45台）を基本とした台数を確保する。

6.3 動線計画

①動線の構成

公園の動線計画は、公園施設間の相互連絡をスムーズに行うと共に、施設間内の連絡路を効果的に配置するものであり、先に示したエントランスや主要施設の位置、博覧会の園路形態の活用を考慮し以下のように設定する。

●人の動線

- ・人の動線は、北エントランスと西エントランスの2ヶ所が結節点となり、それぞれの場所から放射状に主要施設への連絡する動線を主動線として設定する。この動線は誰もが歩きやすいユニバーサル園路となるよう配置する。なお、幅員構成については地形条件等も加味し配置する。各エリア内は、細動線により全体的なネットワーク化を図る。

●車の動線

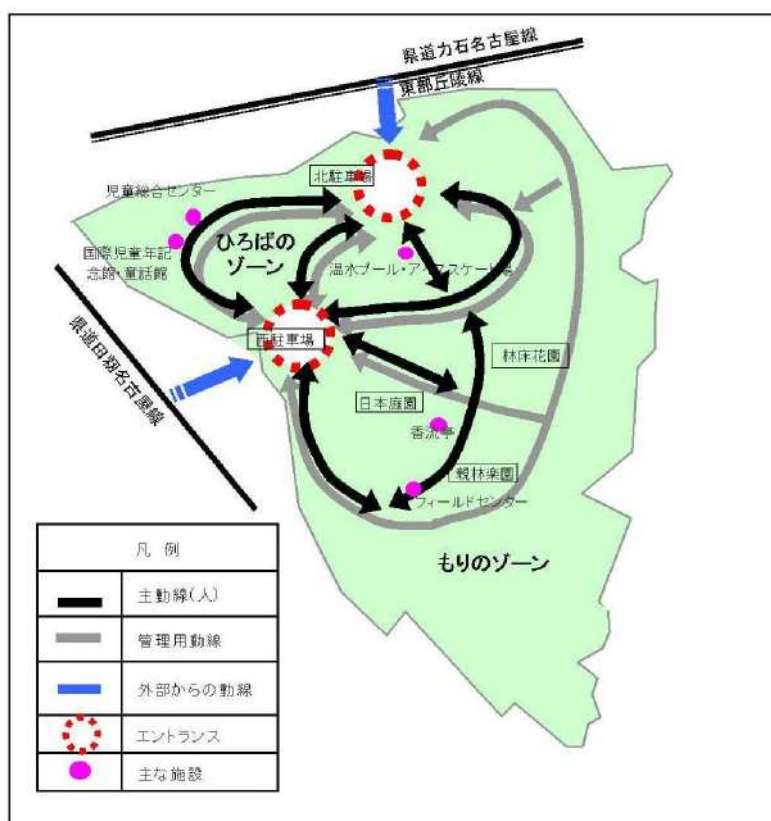
ア)管理用動線

- ・先に示した主動線ともりのゾーン外周部を結ぶ動線を管理用動線として設定する。防災時の動線としても機能する。

イ)外部からの動線

- ・外部からの動線は、北エントランスに配置される北駐車場、西エントランスに配置される西駐車場への公園外部から公園内への進入路となる動線である。

■動線の構成イメージ



②園路計画

●幹線園路

- ・動線の構成で示した主動線の内、管理用動線を兼ねるものを幹線園路として設定する。幹線園路は、公園の中心部に環状型で位置し、北エントランス、西エントランスを連絡するAタイプとその他の路線であるBタイプに区分する。Aタイプは、防災時の主となる動線として機能する。
- ・基本幅員は、Aタイプについては、景観面のシンボル性を考慮し並木道となるよう12mと設定し、Bタイプは8mと設定する。

●支線園路

- ・幹線園路を補完するルートであり、基本幅員は2～6mとする。
- ・前項で示した主動線の内、「もりのゾーン」の樹林地内園路も支線園路として扱う。また、健康スポーツひろば南地区は、敷地形態上2つの広場に分断されるが、博覧会施設であったグローバルループの一部を活用し、ユニバーサル動線で連絡する。

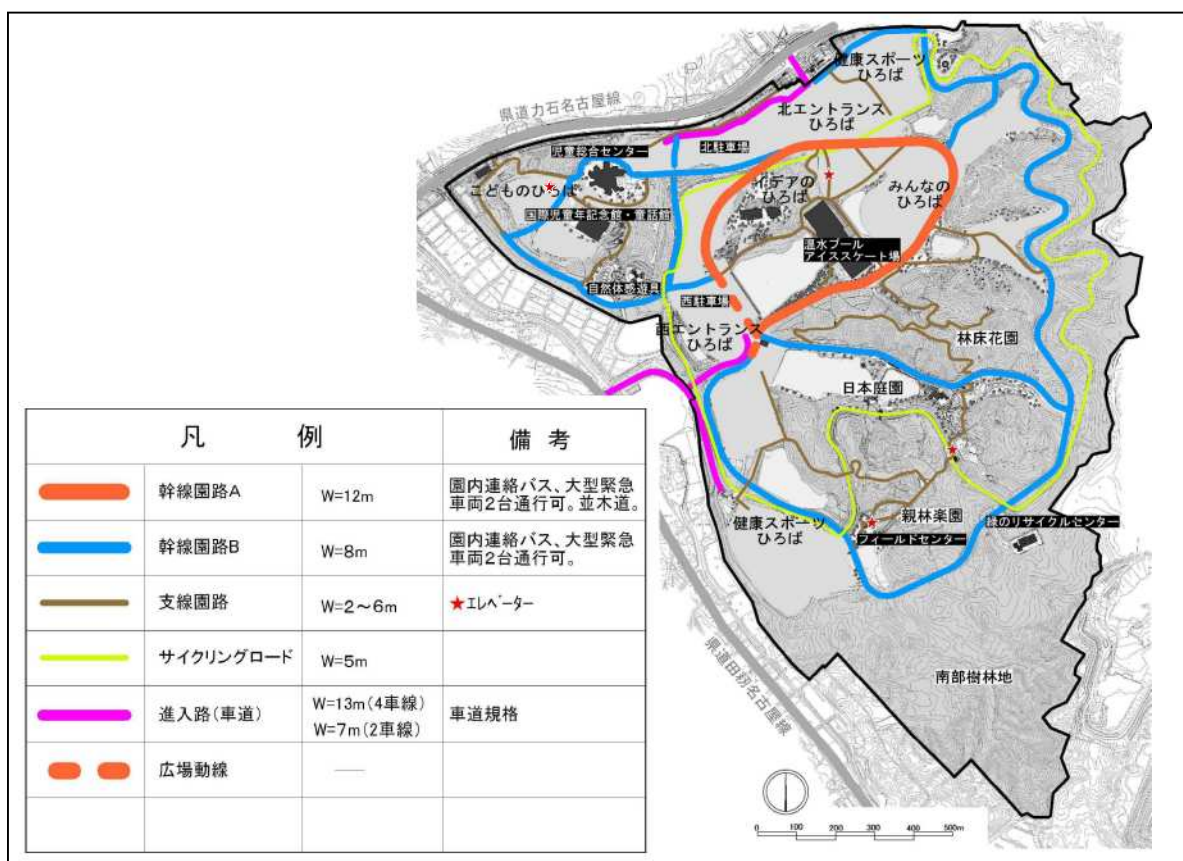
●サイクリングロード

- ・自転車専用の動線である。もりのゾーンについては既存のルートを踏襲し、ひろばのゾーンについては、施設配置計画と整合を図りながら新規整備する。

●進入路

- ・両エントランスから駐車場までの動線であり、車道規格として整備する。

■園路計画



6.4 ユニバーサルデザイン

誰もが安心して利用できる「人にやさしい公園」となるようユニバーサルデザインを推進する。施設整備の指標としては「愛知県 人にやさしい街づくり」による基準を基本とする。

●アクセス

- 公園の主要施設や見所は、誰もが到達できるよう歩きやすい主動線としてネットワークさせる。主動線の園路勾配は4%を目標とするが、地形上やむを得ない場合は8%以下とする。
- 動線の結節点となる場所には公園全体の案内板やルート表示を配置する。また、視覚的な表示だけではなく、場所によっては、点字等による誘導を行う。
- 急勾配が想定されるルートや階段が存在するルートは、必要に応じエレベーター等の設置を行う。また、情報の提供や迂回動線の案内を行い、利用者が自ら判断できる施設整備を行う。

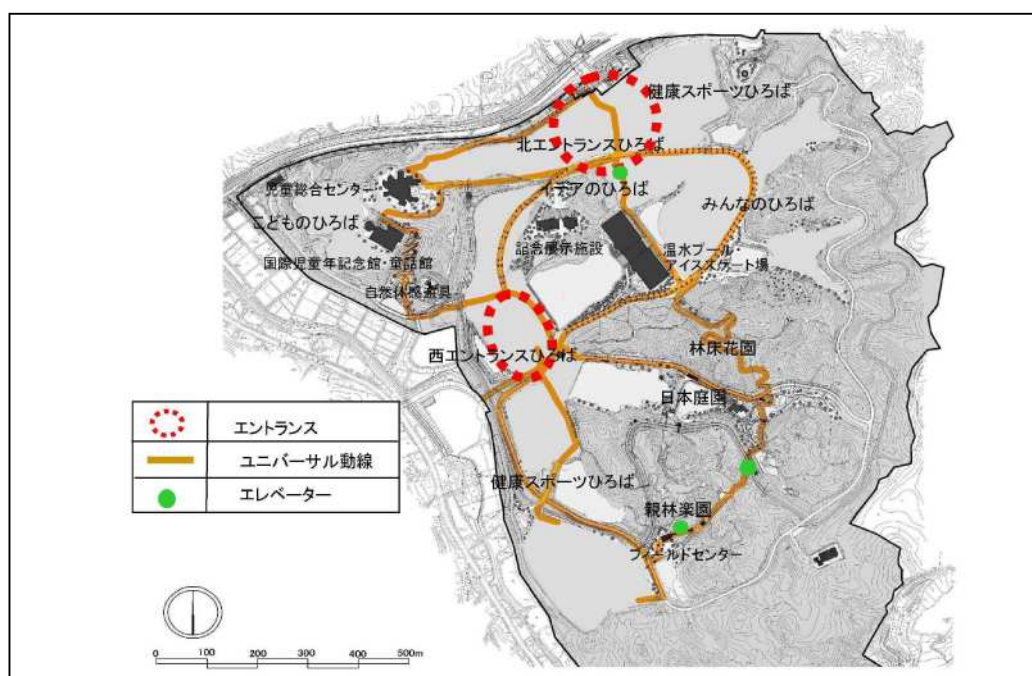
●プログラム

- 高齢者や障害者等が安心して参加できるレクリエーションプログラムの導入を検討する。

●施設整備

- 誰もが利用しやすく、安全性に配慮した施設整備を行う。
- 主要施設やトイレには乳幼児や障害者への対応を図った施設整備を行う。
- 植栽や水景整備により、香りや木々のざわめき、水の流れの音などが楽しめる工夫を行う。

■ユニバーサル動線図

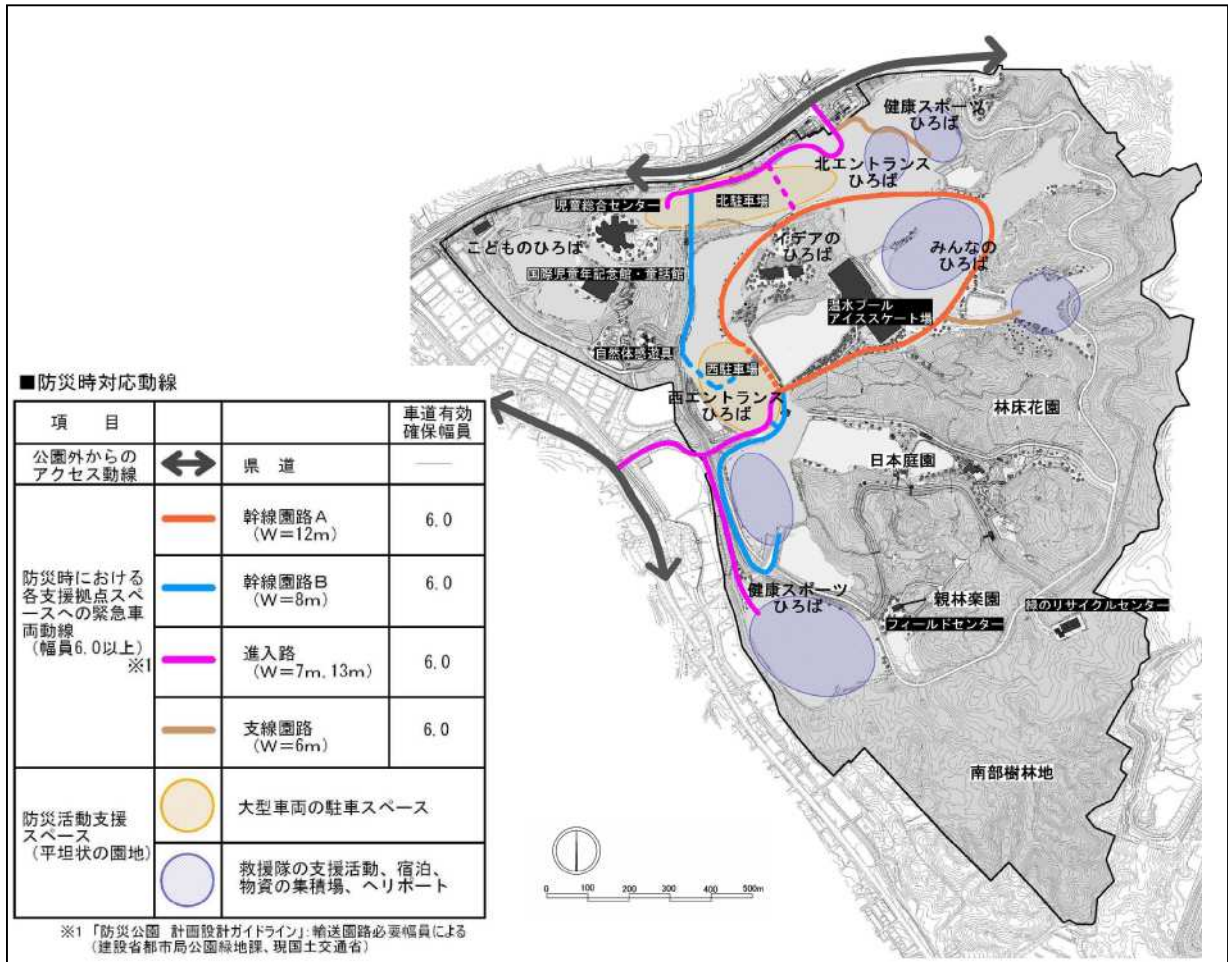


6.5 防災計画

中核広域防災活動拠点として必要となる以下の機能を整備する。

- ・ 救援部隊の輸送機能の確保するため、公園入口から防災活動支援スペースとなる広場等へ連絡し、緊急車両が通行可能な幅員 6.0m を満足する園路を、緊急車両動線として設定する。
- ・ 防災活動支援スペースとしては、大型車両の駐車スペースに駐車場を配置する。また、救援部隊の支援活動、宿泊、物資の集積場については、大空間である多目的広場、多目的球技場、大芝生広場、キャンプ場、野球場にて対応する。
- ・ 臨時ヘリポートは、ヘリコプターの離着陸機能を考慮し、障害物のかからないコースに対応できるスポーツ広場などを対象に設定する。
- ・ 救援部隊の拠点として救援部隊の指揮所をメインエントランスに設ける複合的な施設（パークセンター等）で対応する。また、備蓄庫をパークセンターと一体的に整備する。

■ 防災時対応動線図



6. 6 自然環境保全計画

公園が位置する名古屋東部の尾張丘陵は、下図に示す愛知県の骨格を形成する緑地の一端に位置しているとともに、伊勢湾をとりまく地域の湿地を中心として成立する周伊勢湾要素種とよばれる全国的にみても希少な植物種が分布している。また、名古屋を中心とする都市域を緑で包む都市縁辺部の緑にあたり、都市環境を支える重要な緑地となっており、近接する香流川は、長久手町の緑のネットワークの骨格軸として位置づけられている。

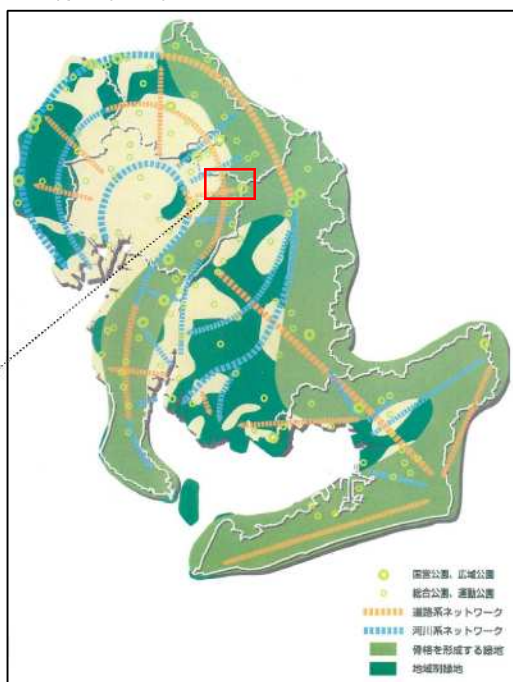
公園整備にあたっては、周辺地域の自然環境との連続性に配慮しながら、園内自然環境の保全を基盤として捉え、計画を進める。

具体的には、既存樹林地の維持管理や水環境の保全により豊かな自然環境の育成を図っていく。また、施設の配置や園地空間に対しての造園的修景は、博覧会施設跡地の平場を活用していく。なお、動植物の保全に際しては、博覧会整備前における現地調査結果を踏まえ対応する。

■愛・地球博記念公園周辺の緑地状況



■緑の将来像図



出典) 愛知県広域緑地計画 平成11年 愛知県

(植物)

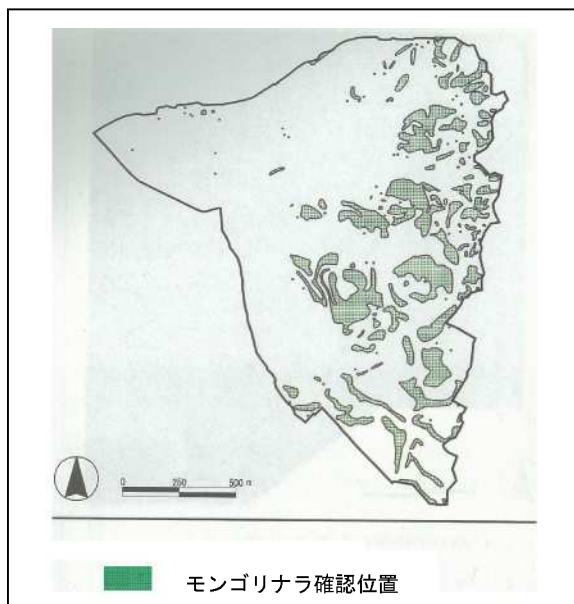
- ・本公園の土壌の母材は、矢田川累層の砂礫層及び第三期層が中心であることから、植物への影響として保肥、保水、通気、透水性に劣り、貧栄養で根系の発達しにくいことが上げられる。そうした土壌に適応し、公園内に生育しているモンゴリナラ・コナラ林やツツジ類などの既存樹林は、本公園の自然環境を特色づける植物であり、土壌条件を極力改変せず、それらが生育できる環境条件の維持を図る。
- ・博覧会博覧会施設跡地での自然回復を図る。(こいの池南側の植樹など)
- ・現況種における注目すべき植物群落は、貧栄養湿地群落※、モンゴリナラ群落が上げられる。貧栄養湿地群落は、もりのゾーンにおけるため池周辺、モンゴリナラ群落は、公園の樹林地全域で確認されている。植物種から見た保全重要性の高いエリアは調査結果によると、かえで池・めだか池(日本庭園)南側と公園南部における二次林であり、維

持管理において十分配慮する。

※ サギソウ、シラタマホシクサ、ミミカキグサ、シマジタムラソウ、タチモ等

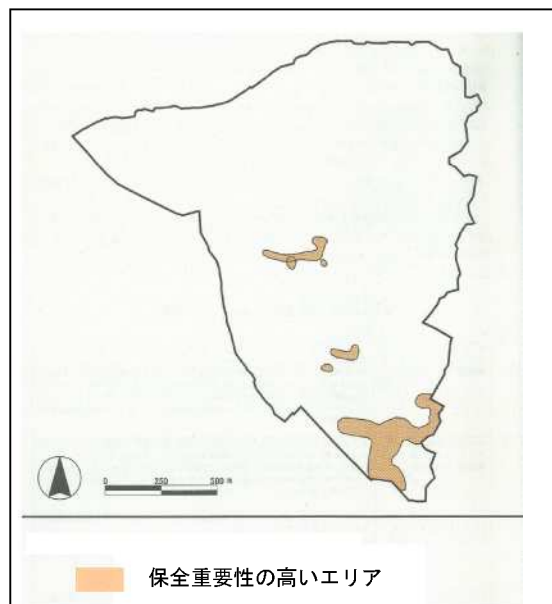
■注目すべき植物種(モンゴリナラ)確認位置

(出典:2005年日本国際博覧会に係る環境影響評価書)



■注目すべき植物種からみた保全重要性の高いエリア

(出典:2005年日本国際博覧会に係る環境影響評価書)



(動物)

- ・ 博覧会整備前の現地調査結果によると、確認された注目すべき動物種は、鳥類としてオオタカ、ハチクマ、カワセミ、アオゲラ等の14種、魚類として、カワバタモロコ、ホトケドジョウ、昆虫類として、ギフチョウ、ベニイトトンボ、ハッチョウトンボ等8種が確認された。これらの動物種の多くはササ池、カキツバタ池、日本庭園東側の池やかめの池等のため池および樹林地周辺で確認されており、ため池を中心に生物の生息環境の保全に配慮した公園整備、活用とする。

(水系)

- ・ 園内の自然環境の要となる「水系」とその水を蓄える「ため池」の水辺環境を保全する。また、富栄養化の防止として水質の負荷を考慮し、集水域へ施肥を過度に行わないことなど注意する。
- ・ 舗装の整備にあたっては地下水の涵養や洪水調整に配慮し、雨水浸透型の施設整備を推進する。また、水辺の護岸は多自然型にするなど多様な自然環境の育成に配慮した整備とする。
- ・ 園内のため池は、地域における農業用ため池としての機能も有しており、公園利用に際し留意していく必要がある。

(工事中の配慮)

- ・ 工事中的環境への配慮としては、既存樹林内への不用意な立ち入りを禁止することや、工事で発生する濁水について処理を行った上で放流を行うものとする。また、環境負荷低減の配慮やリサイクルの推進を図る。

6. 7 景観計画

- ・緩やかな傾斜をもった丘陵地形であり、谷筋、尾根筋、ため池など、変化のある景観を楽しめる景観計画とする。特に、ため池は本公園に多数散在しており、水景を取り込んだ潤いのある景観とする。
- ・もりのゾーンや大花壇など博覧会前整備区域は、博覧会時の景観を引き継いでいく。また、新たに整備する施設周辺は、背後の樹林地との調和を考慮する。
- ・個々の地点における、見通し、眺望などの景観演出要素を考慮しながら特色ある整備を行う。

■個別方針

①エントランスからの景観

- ・エントランスからの景観は、周辺の樹林地やため池との調和を考慮しながら、公園の玄関にふさわしい華やかな景観とする。

②芝生の広がり景観

- ・公園の中心的位置にある大芝生広場は、博覧会における愛・地球広場を活用しつつ、来園者が広々とした開放的な芝生の広がりを感じられる景観とする。

③ため池沿い、沢筋の水と緑の景観

- ・ため池沿いは、沢筋に展開するため池や背後の樹林地からなる水と緑により構成し、谷地形の見通しを生かした落ち着いた景観とする。

④施設の景観

- ・配置する各施設の整備にあたっては、周辺の樹林地や地形、ため池などとの調和がとれた景観構成とする。
- ・標高が高く、周辺への眺望が良好な場所は眺望ポイントとして活用する。

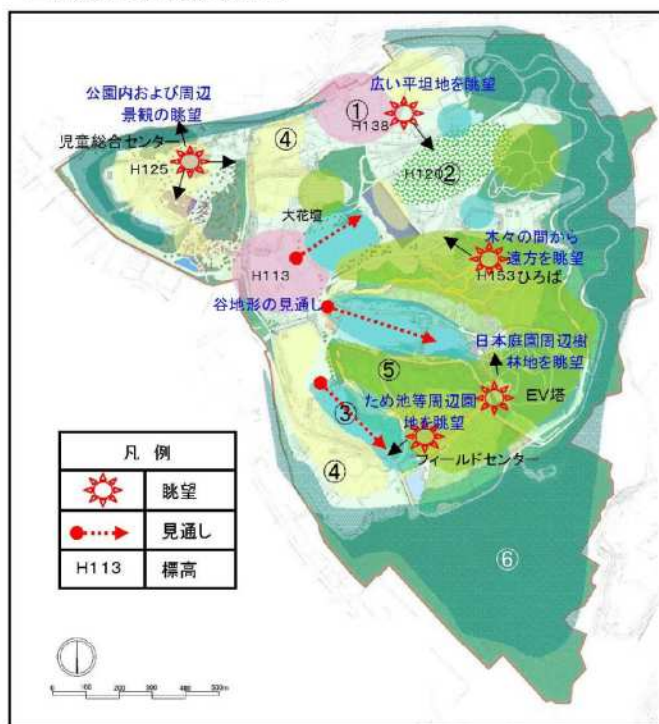
⑤もりのゾーン周辺樹林の景観

- ・博覧会で整備済である「もりのゾーン」等の園地内の既存樹林地は、林床などの整備により、美しい樹林景観とする。

⑥外周部樹林地の景観

- ・公園外周部及び南部の樹林地は、公園外周を包む緑量感のある樹林景観とする。
- ・北側外周部の県道沿い法面は、来園者を公園へ誘導する華やかさを演出した樹林景観とする。

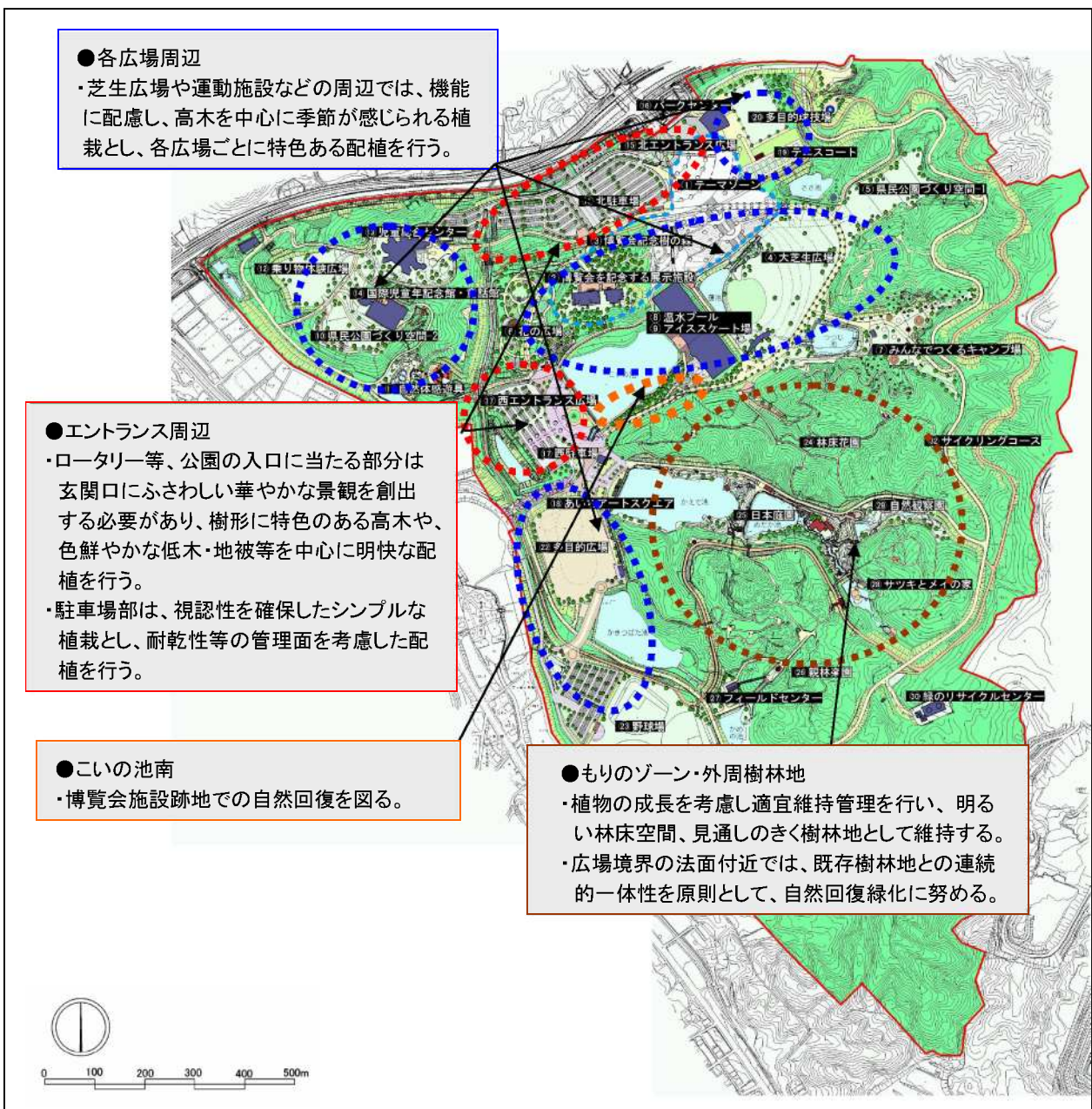
■個別方針の該当位置



6. 8 植栽計画

- ・ひろばのゾーンで、博覧会施設撤去後の景観上のポイントとなる園路、広場、ため池沿い、主要施設周辺において、それぞれの場所の機能（修景、緑陰の確保、鑑賞等）を考慮した植栽を行う。
- ・もりのゾーンや公園外周部の既存樹林地は、緑豊かな景観を保持するため、適切な維持管理を行う。
- ・閉園前に仮移植されている旧公園の樹木を積極的に配植する。

■植栽計画図



【資料】

■ 「21世紀にふさわしい公園づくり委員会」委員名簿

(委員は五十音順)

	氏名(敬称略)	役職等
委員長	わくい まさゆき 涌井 雅之	桐蔭横浜大学教授
委員	あそ ゆうや 阿蘇 裕矢	静岡文化芸術大学教授
	いとう しょうこ 伊藤 祥子	長久手町助役
	おがわ たくのり 小川 巧記	(財)2005年日本国際博覧会協会市民参加 プロジェクト
	おがわら たかお 小河原 孝生	(社)日本環境教育フォーラム理事
	せりざわ しゅんすけ 芹沢 俊介	愛知教育大学教育学部教授
	ちかみ さとし 千頭 聡	NPO法人こども環境活動支援協会代表理事 日本福祉大学情報社会科学部助教授
	ながたに たかし 長谷 高史	愛知県立芸術大学教授
	はぎわら よしゆき 萩原 喜之	NPO 中部リサイクル運動市民の 会代表
	はんだ まりこ 半田 真理子	(財)都市緑化技術開発機構研究所長
	まつもと まもる 松本 守	(社)日本公園緑地協会 研究顧問
	みつい まさあき 三井 政昭(16年度委員)	(財)愛知県体育協会事務局長
	つだ きんや 津田 欣也(17年度委員)	(財)愛知県体育協会事務局長
	やまもと りえ 山本 理絵	愛知県立大学文学部助教授

■ 「21世紀にふさわしい公園づくり委員会」協議の経過

- 第1回 平成16年11月 2日（火） 名古屋通信会館
- ・委員会の運営
 - ・青少年公園の計画の前提及び整備・活用方針（案）
- 第2回 平成17年 2月22日（火） 名古屋通信会館
- ・公園計画策定スケジュール（予定）
 - ・青少年公園の整備・活用方針（案）及びゾーニングへの展開
- 第3回 平成17年 9月13日（火） 名古屋通信会館
- ・パブリックコメントの結果概要
 - ・ゾーニングと整備内容及び全体計画
- 第4回 平成17年11月18日（金） ウィルあいち
- ・小委員会の結果
 - ・新たな検討機関の設置
 - ・整備・活用の方針、県民と行政のパートナーシップによる公園整備と管理運営及び整備内容
- 第5回 平成18年 1月12日（金） 名古屋通信会館
- ・暫定基本計画
 - ・「愛・地球博 理念継承エリア検討委員会」検討状況
 - ・新公園名称

